

Q&Aで学ぶ 感染症コンサルト

訳：渋江 寧

Q&Aに擬態した、感染症診療の ベスト・オブ・エビデンスガイド

まず結論から入ろう。本書の原著は有り体な Q&A 読み物に擬態した、ハイレベルな臨床感染症のエビデンスブックである。本書はその翻訳本の体裁をとりながら、最適な日本語版エビデンス・ガイドブックの役割を果たしている。いい意味で原著も買って読み込みたくなる、翻訳本としてベストの働きである。相当な傑作が感染症診療テキストのラインナップに加わったと思う。控えめに言っても、日本の感染症医あるいは感染症診療に関心の高いホスピタリストにとって、マストバイの一作が爆誕したのである。

原著は、かの Massachusetts General Hospital (MGH) で 2020～2024 年に感染症フェローシップを修めた、米国の新進気鋭感染症医（といっても 4 年制大学 2010 年卒だが）の Alexander Tataru 医師による 2023 年の単著である。現役の感染症フェローが相当な質と量のエビデンスを備えて執筆した感染症コンサルテーションのテキストであることが、この原著の秀でた特性である。そして、これを日本の多忙な感染症指導医が単独で丁寧に読み解き、わかりやすい邦訳版を記述したということが驚嘆と賞賛に値することと思う。

本書は、序章で感染症コンサルト医のコンピテンシー、診療業務、知的探

究心、コミュニケーションスキル、学習のリソースについて、感染症医ならいちいち頷いてしまうナラティブから入る。第 2 章から一変し、感染症コンサルト医が対峙するコモンな病原微生物と感染症を網羅して、これらに関する臨床上の疑問—Q: question に対して、相当な質と量を備えたエビデンス・サマリーをもって A: answer を出し、著者の私見を交えて解説する形式で一貫している。ところで、概して優れた臨床研究の原著論文は、introduction のパートにその研究命題の領域の最新のエビデンス・サマリーが記述され、introduction を読み込むことでその領域の効率的な学習と情報収集に役立つものである。本書ではさまざまな臨床上の疑問に対して、もれなく原著論文の introduction を凌ぐ高密度のエビデンス・サマリーをもって論じ、著者の見解をきっちりと示しているのが圧巻であり、際立った特徴といえる。

言うなれば、感染症診療現場の“あるある”な疑問に対して何気なく答えるフリをして、骨太から微細なところまでのエビデンスを網羅し、全身全霊の博覧強記で応じるという、なんとも爽快な図式である。どの章を読んでも、感染症指導医クラスなら一度は読んだことのあるメジャーな原著論文の引用に首肯し、どこから掘り出してきたの

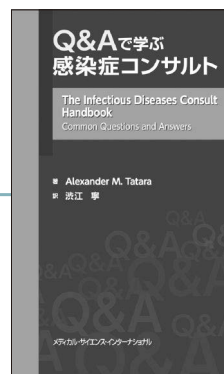
か微に入り細に入りのトリビア的なエビデンスに唸られること請け合いである。自分のように、すでに倦怠期といっても差し支えないキャリアの感染症指導医が読み込こんでも、ハラハラとときめき、共感と安心感を覚える優れたコンテンツだと思う。

こんな原著を、訳者の渋江先生は単に翻訳し訳語を与えたのではない。実際に感染症コンサルトの診療現場に則して読み込み、十分に腹落ちしたうえで、この希有な知的財産の集合体を正しく活用することをガイドするコーチ役となっている。訳注を記すかにみえて、著者のやや強気な論調にクールに批判的吟味をし、時に自分の診療経験に基づくフォローを入れ、読者が大きく首を縦に振る安心感を与える、渋江先生ならではのコメントが随所にちりばめられているのが秀逸である。

この優れた感染症診療テキストを、診療と教育の場にもたらしてくれた渋江先生に感謝の意を表し、これを日々の仕事に役立てたいと思う次第である。

大場 雄一郎

（大阪急性期・総合医療センター
総合内科・感染症科）



MEDSi
5,500円(本体5,000円+税10%)
A5変/362頁
ISBN978-4-8157-3121-2